

ローマ人の食事の席(寝転んでの食事)



ローマの富裕層たちは、邸宅の中にある「トリクリニウム」(ギリシア語で「3台の臥台」という意味)と呼ばれる部屋で、「レクトゥス・トリクリナリス」と呼ばれる食事専用の臥台(寝椅子)に寝そべて食事(晩餐)会を行った。元は小アジアの習慣で、埋葬時の死者を表し、この習慣がギリシアやエトルニア(BC8世紀からBC1世紀頃にイタリア半島中部にあった都市国家)に伝わり、ローマへと広がった。寝た姿勢で食事をするのは不便であったが、貴人のステイタスとして採用された。

寝椅子「レクトゥス・トリクリナリス」は木材、青銅、象牙、銀などで作られ、テーブルに向かって少し上向きの傾斜があり、その上にクッションやクロスを敷いて使用した。食事の作法としては、①左脇を下にして寝そべり、②左の肘で体を支え、③右手でテーブルに置かれた食べ物を素手づかみで取って食べた(ナイフやスプーンを使って食べることもあったし、左手を使うこともあった)。

1台のレクトゥス・トリクリナリスは3人用で、3台のレクトゥス・トリクリナリスがテーブルをコの字形に囲むように置かれた。通常9人ないしは10人程度で行われるのが一般的だったが、その他に特別来賓用として、主にVIPをもてなす少数人数用の小さなトリクリニウムを備えた邸宅もあった。また、座席には上席や末席があって、社会的地位によってその位置が厳格に決められていた。

列席者の主賓は馬蹄型上辺にあたる臥台の一番左側(下図①)に座った(①の位置は「執政官の座」と呼ばれ、日本でいうところの上座である)。以下、上辺の左から右(②から③)、左辺の上から下(④から⑥)、右辺の上から下(⑦から⑨)、という順番になっていた。

招いた邸宅の主人は左辺の上部で、主賓と会話できる位置をとることが多かった。

マナーとして、出席者は公服である「トガ」という白く細い毛糸(ウール)で織られた服で正装(男女に大きな違いはない)をしなければならなかった。ローマの元老院の議員たちが着る布を巻き付けたような服で、布幅は、身長3倍もあった。通常、ローマ人は「トゥニカ(チュニカ)」と呼ばれる短衣を着ており、トガはそのトゥニカ(チュニカ)の上に体に巻き付け羽織った(外国人・奴隷・解放奴隷は身に付けることが許されなかった)。トガは高価だったため、持っていない者は招待主から借りて着用した。トガに代わるものとして、食事用の使い捨てのいろいろな色で出来た服「シュンテシス」を着ることもあった。

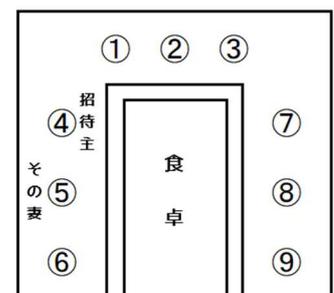


なお、料理は、前菜、メイン料理、デザートというコース料理がふるまわれた。世界中から珍味などが集められ、満腹になると鳥の羽で喉を刺激して、食べた物をすべて吐き出して、また、次の料理を口にする者もいた。メロン、牡蠣などはローマ人が食べ始めたと言われている。

ローマ帝国の哲学者セネカは、「ローマ人は食べるために吐き、吐くために食べる」と評した。

【参考】庶民の男性は、正装として腿丈のトゥニカの上から無地無染色の自然のままの羊毛の色(濃いベージュ)のトガを着た。トガを着つけるのは非常に煩わしかったので、BC1世紀頃から日常ではトゥニカを二枚重ね着したり、ギリシア風外套を着るのが普通になった。トゥニカは古代ギリシアのキトンから発展したもので、ウールでできた大判のTシャツのような服で、五分袖から七分袖程度の袖が付き、膝下丈(労働時にはベルトでたくしあげて膝上丈)で着た。袖や裾が長いものは軟弱だとされ嫌われた。トガが現在のスーツなら、トゥニカはシャツとジーンズのようなもので、貧しい市民はトゥニカだけを衣類とした。

席 順 **厳守**



※参考：最新世界史図説タペストリー(帝国書院)／日伊相互文化普及協会
古代ローマライブラリー／ウィキペディア「トガ」